

「百年先につながる」支援がしたい



JICA経済基盤開発部
 運輸交通・情報通信グループ
 運輸交通・情報通信第一課
 課長

小泉 幸弘
 KOIZUMI Yukihiko

大学院卒業後、1993年にJICAに就職。無償資金協力調査部、運輸省第二港湾建設局出向、社会開発調査部（いずれも当時）、カンボジア事務所、アジア第一部を経て、2009年5月より現職。

ミャンマーでイギリス植民地時代の車両とともに(右から2人目)

JICA経済基盤開発部の小泉幸弘さんは、交通インフラ分野の協力で豊富な経験を持つ。目指すのは、百年先を見据えたインフラ協力だ。

交

通はいかに人々の暮らしを便利にできるか。それが、私が学生時代に研究していたテーマです。専攻は「交通計画」。休み中に各国を旅行し、環境問題やバリアフリーに配慮したヨーロッパの先進的な交通システム、中国やメキシコといった開発途上国の交通の状況などを見て回りました。卒業後は、これから国づくり、地域開発に取り掛かろうとしている国や地域、またアジアやアフリカなど都市への人口集中が深刻な問題となっている途上国で交通計画に携わりたいと考え、JICAに就職しました。

入構以来、私がJICAで最も深くかわつてきたのが、交通インフラ分野への支援です。社会開発調査部(現・経済基盤開発部)では、マニラやポンペンといった都市で都市交通計画の策定調査を担当しました。マニラでは精緻なデータ収集と分析に基づく総合都市交通計画を提案。またポンペンでは、パイロット事業として市内にバスを走らせました。そうした提案内容が、施策として実現されているのを見るのはうれしいものです。マニラLRT(ライトレール)の路線拡大や、ポンペンの道路整備が着実に進んでいるのも、その一つです。

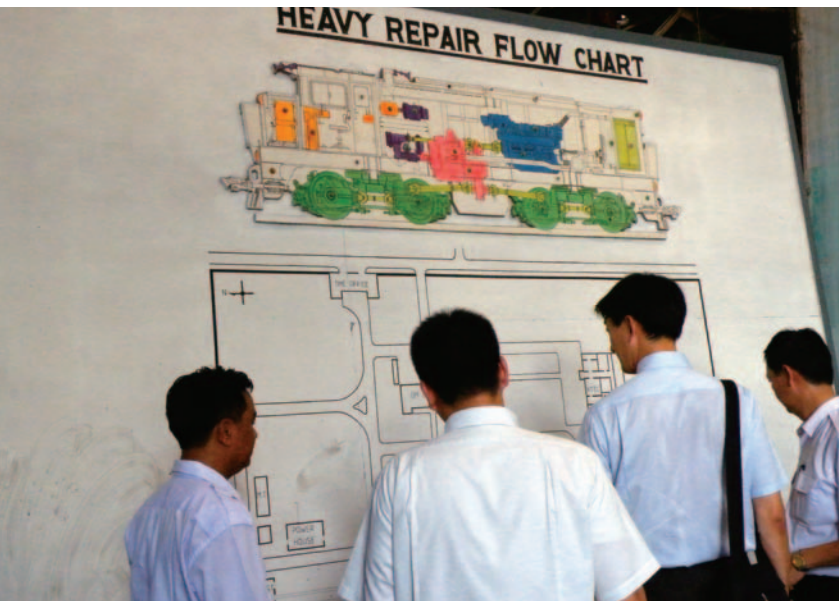
カンボジア事務所では、ポンペンとベトナム・ホーチミンを結ぶ「アジアハイウェイ1号」の整備も担当しました。メコン地域を東西に結ぶ大型事業です。大規模なインフラ整備となれば、当然、賛否両論が出てきますが、地元住民の方々と利害関係者との意見調整に臨むときに、私がいつも胸に手を当てて考えていたのは、「この道路は百年先のことを考えても、絶対に必要だ」と、自信を持って言えるかどうかということ。「人々のためになる」と確信を持っていたからこそ、あのときプロジェクトを前進させることができたと感じています。

現在は、主に鉄道や港湾を中心とした途上国の運輸交通インフラの整備に取り組んでいます。自分の担当する案件にベストを尽くす一般職員の業務に對し、課長として、この分野への協力をどのように進めていくか、個々の案件をより大きな構図の中でとらえ、どういった方向性でインフラ支援を進めるのが最適かを常に考えています。また、そのような考え方を常に対外的に発信していくよう、努めています。

アジア開発銀行によると、2010〜20年の域内インフラ整備の需要は約8兆ドルと推計されており、JICAにも

も大きな期待が寄せられています。特に鉄道分野では、最近の各国の鉄道ビジネスへの関心の高まりを背景に、出張先などで日本の鉄道について説明を求められる場面も増えています。都市への人口集中が続く途上国にとって、東京という巨大な都市圏で緻密な鉄道ネットワークを作り出してきた日本の知見は、とても魅力的なはず。そして、車両や設備の投入にとどまらず、運転・保守・管理などのオペレーションに至るまで、丁寧に技術移転を行ってきた日本の支援の経験は、今後ますます必要とされるに違いありません。

明治時代の土木技術者で、パナマ運河建設にも従事した青山土技師は、次のように言っています。「私はこの世を、私が生まれてきたときよりも、より良くして残したい」。この言葉を同じ土木技術者として心に刻み、「百年先にもつながるような協力」を、より多くの国々に広げていきたいと思います。



鉄道分野の今後の協力の可能性を探るため、ミャンマーを訪問(右から2人目)。機関車修理工場では、技術水準や要員体制、検修設備、予算などを確認した